

令和5年度 自己評価及び学校関係者評価書

令和6年 3月

24502 札幌市立小野幌小学校

- 1 本年度の重点目標（目指す学校像） **笑顔つながら あったか・安心・小野幌**
 2 本年度の実践目標（目指す子ども像） **自分でつなぐ、みんながつながる子**
 3 自己評価結果 【達成状況】 A：十分達成されている B：達成されている C：改善の余地がある D：再検討が必要である

分野	評価項目	自己評価		学校関係者評価	
		達成状況	成果・改善の方策	自己評価の適切さ	改善策の適切さ
学ぶ力の育成	<課題探究的な授業の充実> 子どもが「問い」をもち、見通しを立て、対話を通して学びをつなぐ授業が行われていたか。また、学びを実感する「振り返り」を、次の学びにつなげることができているかを育成することができていたか。	A	・今年度も教員が互いの授業を参観する研究授業を全学級で行った。子どもに見通しをもたせ、話合いの焦点化や個別最適な学びを行う問題を考えた上で、意図的な教材作りを進めることができました。 ・学びを実感する「振り返り」を通して、授業で分かったこと、新たな問い、友達や自分の考えのよさを認識することで、意欲的に次の学びにつなげることができた。次年度以降のAARサイクルを取り入れた課題探究的な授業実現のためにも継続して「Reflection振り返り」を進めていきます。 ・来年度は「学びのコントローラーをもっているのは子ども自身」というキーワードのもと、教師主導の一斉授業から、子どもが主体的に問いをもち、様々な方法で解決に向かうことができる授業となるように、授業研究を進めていきます。また、課題探究的な学習を通して「多様な学びを実現する個別探究と対話による思考の再構築を実現する協働探究で学びをつなぐ子」の育成に向け、更に授業改善に取り組んでいきます。	A	A
	<実効性のある教育課程の編成> 年間を見通し、教科と教科、教科と行事、特別活動と行事等、ねらいと目標にあったカリキュラムマネジメントが行われていたか。	A	・各学年の年間カリキュラムに目指す子どもの姿を位置付け、計画、実行、評価・改善を繰り返してきました。「札幌市における教育活動のガイドライン」改定に合わせ、教育活動の見直しを図り、再開、縮小等の吟味を行い、子ども一人一人が『自分が大切にされている』と実感できる教育活動を進めることができました。 ・コロナ禍で制限されていた体験的な学習を充実させ、「人と関わる」「本物に触れる」「自分で体験する」経験から、学ぶ力と豊かな心の育成、キャリア教育の充実に取り組むことができました。 ・来年度は、地域学校協働推進事業やコミュニティスクールなど、地域資源を生かした課題探究的な学習を通して具体的な資質・能力の育成につなげていきます。	A	A
	<ICTの効果的な活用> タブレット端末を効果的に活用し学びを深めることができていたか。また、家庭と学校の学びをつなげることができていたか。	B	・今年度は「ICTを活用し、課題探究的な学習の中で主体的に学びを深める子どもの育成」を研究主題に、1人1台端末を学習ツールとして効果的に活用する授業について全教員で検討してきました。前年度までに体育の跳び箱の授業で動画を撮影し動作の確認をしたり、算数や社会ではformsを活用しグラフや表にまとめたりなど活用することができていました。今年度は、自分と友達の考えを表現し合う「協働的な学び」を支えるツールとして、オクリンクに文字や動画を送って共有したり、ムーブメントの集計機能やスタンプ機能を活用したりすることができるよう指導したため、友達と考えを交流するために端末を活用する力が育ちました。 ・来年度は、学校での学習でも家庭での学習でも、デジタルとアナログの両方を計画的にバランスよく活用していきます。直接見る、話す、聞く、書くなどのアナログな学びも大切にしながら、ICT機器をいつ、どのような手法で取り入れると子どもたちの確かな学力につながるか更に研究を進めていきます。	B	A
	学校関係者評価委員による意見		・学校での指導により、子どもたちがICTを活用し学習に取り組んでいることはすばらしい。達成状況がBだが、評価委員会としてはAでもよいと考える。 ・ICT機器が学習においても生活においても不可欠なことのできないアイテムになっている今、子どもたちのスクリーンタイムの管理が大切になってくる。学習での利用と遊びでの利用について、家庭でも約束事を決める必要があると考える。 ・1人1台端末の普及に伴い、よりWi-Fi設備などの充実が求められる。端末+周辺環境の充実をお願いしたい。 ・課題探究型の授業は、最重要項目であると思いますが、「AARサイクル」については、原理主義にならないようお願いしたい。また、「対話」についてはとても重要だが、教師のファシリテーション力を上げなければ逆効果になる場合が多い。ぜひとも教師の研修の充実をお願いしたい。 ・引続き体験的な学習の充実を図るようお願いしたい。		
豊かな心の育成	<人、もの、事とのふれあい> 上学年への「あこがれ」や人への「おもいやり」を言葉や態度で表し、自分が大切にされているという実感を、他者への優しさにつなげる心を育むことができていたか。	A	・今年度の運動会は全校児童全員で互いの競技を観戦したり、学習発表会では児童公開日を設定し、全学年の発表を観覧し合ったりすることを通して、上級生としての意識や上級生へのあこがれの気持ちを醸成することができました。活動後に「ほめる」（メッセージカード）での交流を行うことで、お互いの頑張りを認め合い子ども同士の「つながり」を実現することができました。 ・全校朝会を全校児童が一堂に会して行うことができるようになり、一体感を感じる中、月のめあてや学校のきまりについて意識付けを行うことができ、高学年が低学年の手本になると意識を高くもつことができました。 ・北海道いじめ問題対策連絡協議会主催の令和5年度「絆づくりメッセージコンクール」では、本校児童会書記局が作成した児童会テーマ「あいさつで笑顔の連鎖」が、札幌市審査で最優秀賞を受賞しました。日頃から、「小野幌レンジャー」として登校時のあいさつ運動や全校朝会で自主的な活動するなど、自分たちで小野幌小学校をよくしたいという思いが形となりました。子どもたちの自主的な活動が、お互いを尊重し、支え合いながらよりよい学校生活を送ろうとする意識を高めています。 ・来年度、「学校いじめ防止対策基本方針」の改定を行い、月1回のいじめ防止対策会議や年間2回のいじめ調査を行うなど、いじめの未然防止、早期発見、対処の取組を組織的に行っていきます。	A	A
	<体験活動の充実> 「人と関わる」「本物に触れる」「体験する」教育活動を計画することができたか。 <キャリア教育の充実> 目指す「未来の自分」を意識し、自分で考え行動する経験を通して、小中一貫した教育のグランドデザインにある「15の春」を意識した子どもを育てることができたか。	A	・コロナ禍で活動が制限された昨年度とは異なり、今年度は5・6年生のふれあい委員会が中心となり、より日常的な交流を計画し実施することができました。教師主導ではなく子どもたちが「なかよくなるために」を目標に異学年での遊びを考え活動することによって、目指す子ども像である「自分でつなぐ、みんながつながる子」に近づくことができました。 ・今年度は、6年生の総合的な学習で、保護者の方々との協力を得てご自分の職業についてお話をさせていただいた。また、専門的な知識をもつゲストスピーカーに授業をしていただくことで、子どもたちの働くことへの理解も深まり、更に興味関心も高まりました。様々な体験や出会いを通して自分の将来について考え、その実現を目指して努力する意欲や進路について考えることができました。 ・来年度もパートナー校である厚別中、厚別東小とともに「15の春」を見据えた小中一貫した教育と系統性のある教育課程を計画・実践し、スムーズな中学校進学へとつなげていきます。	A	A
	学校関係者評価委員による意見		・ポストコロナのフェーズにあって、子どもたちのコロナへの不安感が解消されたとは言いきれない。是非ともまだまだ注意深く子どもたちの見守りをお願いしたい。 ・児童同士のふれあいに努め、思いやりと尊敬の気持ちを持ち、学校としての一体感の醸成が図られたことは評価したい。 ・小野幌小の子どもたちは、いつも気持ちのよい挨拶ができうれしい気持ちになる。「挨拶」は豊かな心の基本ともいえるので、より一層の指導をお願いしたい。 ・みどりの活動は、教職員や保護者ボランティア、畑を貸してくださる方の協力が不可欠で準備等たいへんな活動であるが、子どもたちの豊かな心の育成に大きく貢献している小野幌小独自の行事である。来年度以降も継続できるように、教職員、保護者のお手伝いをお願いしたい。		
健やかな体の育成	<体力と健康の促進> 進んで体を動かし、楽しみながら運動能力の向上や体力向上に努める子どもを育てることができていたか。	B	・児童が自ら目標をもって運動することができるように、運動会や各種運動では学習シートを用いて、目標や振り返りを記録しました。運動量を確保しながら、ICT機器や教え合いを通して児童が思考・判断し、できるようになるまでのプロセスを大切に授業づくりを進め、諦めることなく挑戦しようとする子が増えました。 ・休み時間にも体を動かすことができる全校一斉の「縄跳びチャレンジDAY」、期間を設定した「跳び箱運動週間」「マット運動週間」「リズムトレーニング」等の時間の設定、「手作りのバスケットゴールの作成」などの場の提供など、「時間・空間・仲間」を創出することで自発的に体を動かしたくなる工夫を取り入れたが、まだまだ十分とは言えない。昨年度、学校関係者評価委員会でご指摘いただいた、『運動が「義務」ではなく「自然」に感じられる環境づくり』について更に改善していきます。 ・来年度は、体育の授業以外にも、休み時間などを通して、仲間と体を動かす楽しさを感じられる機会を設定し、全国体力テストの結果から課題となった持久力と瞬発力の向上に取り組んでいきます。	A	A
	<保健・栄養指導の充実> 栄養教諭を中心とした食指導や養護教諭を中心とした生活指導の充実が図られていたか。	A	・「みどりの活動（芋植え・芋掘り）」や栄養教諭の食指導により、児童自らが自分の健康、からだづくり、食の大切さについて考えることができました。 ・養護教諭による保健便りや学級活動での生活指導を通して、換気、手洗い、手指消毒などの継続して保健指導、感染症対策を指導し、自らの健康について主体的に考え、行動する力が育ってきています。 ・来年度も外部講師をお招きし、各教科等の内容と関連付けた健康教育や性教育を推進していきます。	A	A
	学校関係者評価委員による意見		・小野幌小に限らず、札幌市内の子どもの体力は相変わらず低いと言わざるを得ません。継続した取り組みをお願いしたい。 ・屋外に出るの運動だけでなく、屋内でもできる動画コンテンツを視聴しながらのダンスやリズム運動を取り入れるなど、冬場の運動する機会を多く設定することが必要である。		
安全体制	<危機管理> 子どもや保護者が安心できる学校づくりがなされていたか。	B	・今年度は、札幌市保護者連絡メール「すぐる」の新たな導入に際し、保護者の協力を得て100%の登録となりました。連絡メールや欠席連絡の他、今後、学校便りなどの文書も添付することで、スピーディにそして確実に情報を保護者に伝えられるようにしていきます。 ・年度途中で危機管理マニュアルの見直し、改善を行いました。職員一人一人の危機管理意識を更に向上させ、組織として不測の事態が起きたときも迅速に対応できるように備えています。 ・今年度も、地域町内会のスクールガードの皆様、交通指導員様、札幌厚別交通安全協会の皆様のご協力を得て、通学路内の見回りや交通安全教室をしていただき、児童の安全を確保することができました。年2回開催しているスクールゾーン実行委員会で話し合われた内容をスクールゾーン便りで周知指導したことで子どもたちの交通安全意識を高めることができました。	A	A
地域との連携	<開かれた学校・情報発信> 社会に開かれたつながりのある教育課程を発信し、地域と連携した教育活動が行われていたか。	A	・学校HPを活用し、子どもたちの日常の活動や出来事を広く発信してきました。また、授業や行事では、地域の方々のご協力を得て子どもたちの学習を支えていただいたり、子どもたちが頑張る姿を見ていただいたりすることができました。更に多くの地域の方々のお力添えを頂けるように、学校の教育課程について広くお知らせし、多くの方々につながっていきたくと考えています。 ・来年度も、学校の考えや学びの意義、「さっぽろっ子学びのススメ」、子どもたちのよさを発信（学校便り、学校HP等）し、保護者・地域への信頼へつなげていきます。また、コミュニティスクールと地域学校協働活動の推進体制を整えていきます。	A	A
	学校関係者評価委員による意見		・導入された保護者メール「すぐる」の柔軟的な活用をお願いしたい。 ・子どもたちの安全を守っている交通指導員やスクールガードがもっと子どもたちの身近に感じられるように、全校朝会等での紹介など子どもたちとの出会う場を設定をお願いしたい。 ・今後のコミュニティスクールの確立に向け、パートナー校3校と地域との連携を更に強めていくことを期待したい。地域、保護者も積極的に協力する		

「学校関係者評価委員会」は、学校が、保護者や地域住民の信頼に応え、家庭や地域と連携協力して子どもたちの健やかな成長を図っていくという観点から設置された組織です。6名の学校評議員の皆様と3名の歴代PTA会長の皆様により、学校の教育活動にご意見をいただき、学校運営に生かしています。

今年度本校の学校評議員の皆様 粟井 信雅 様（同窓会会長） 井上 英輔 様（札幌市交通安全運動推進委員会） 小林 義昭 様（同窓会副会長）
池内 潤樹 様（厚別東児童会館館長） 中川 喜久雄 様（厚別東連合町内会会長） 林 亨 様（北翔大学教授）
学校関係者評価委員の皆様 石澤 伸弘 様（PTA会長） 大江 紋 様（第27代PTA会長） 中塚 由広 様（第28代PTA会長）